

1 今年（H27）の傾向

総評・講評（大問毎に）

【総評】

長文読解2題、対話文読解1題、和文英訳1題の構成であった。大問4問構成という点では例年通り。しかし、英文及び設問の内容の変化のため、問題全体の難度は大きく易化した。

まず第1問、第2問の2つの長文に、選択式の設問が2題ずつ出題されている。昨年は長文読解に選択問題はなかった。また、和訳、説明問題、すなわち日本語で記述する問題は例年通り出題されているが、和訳に関しては基本的な構文と語句の知識があれば解答でき、説明問題に関しても該当箇所を和訳することができれば解答として充分である。

第3問では英語による意見記述が出題されているが、解答スペースも限られており、必要な情報をコンパクトにまとめればよく、求められている英語産出能力は極端に高いものではない。

第4問の英作文も、日本語を一度別な日本語に解釈してから書かねばならないようなレベルのものではなく、基本的な知識を活用できれば取り組みやすい問題である。

ここ数年の記述偏重型の問題はいったん収まった形ではあるが、それでも第1問の問2と問5の対比をとらえる問題や、第2問の3つの段階とそれぞれの違いをバランスよく読み取らせる問題などには、文章全体の主旨、筆者の意図をしっかりと把握した上で解答して欲しいという東北大の出題意図がしっかりと反映されている。また解答にあたっては、仮定法、比較、後置修飾、段落構成、文中での意味把握等、英語読解に必要な要素をしっかりと身につけておく必要がある。解答し易くなったことは事実だが、高得点を取るためにはやはり広い意味での読解力が求められており、バランスの取れた英語力を見るうえでは非常に良い入試問題だったと言える。

【個別分析設問Ⅰ】

昨年度に引き続き、設問Ⅰは標準的な長文読解問題が出題された。課題文は、自分の所有物に対する筆者と亡き祖母の態度の違いを、回想を交えつつ対照的に示すエッセー風の

長文である。英文は読みやすく、構文・語彙の点でも取り組みやすい。設問は下線部和訳が1問（問1）、記述型の下線部説明が2問（問2・問5）、記号選択型の下線部説明が2問（問3・問4）という構成になっており、記号選択型の下線部説明は選択肢がいずれも日本語である。全体的に設問の難易度は標準的で、基本をしっかり押さえた解答作成が求められている。

問1は下線部和訳問題。注意すべき点は2つ。まず、第1文の注意点はthat節内の仮定法過去完了(would have cost)である。主語の動名詞句‘fixing the shoe’が条件の役割を果たしていることを見抜いて和訳に反映させる。次に、第2文の注意点は‘the same was true of …’という表現。第1文と同じこと（修理するのに元の価格より高くなってしまう）が他のものにも「当てはまる」と訳す。また、和訳を工夫するポイントとしては‘discovered’と‘learned’に目を向けておきたい。どちらの語もそのまま直訳すると文意が伝わりにくくなる。ここでは「知った」「わかった」の意味。文頭の‘To my disappointment’も「がっかりしたこと～」と定番の訳を当てると日本語としては不自然になる。ここは思い切って「～と知ってがっかりした」と訳してよいところである。

問2は記述型の下線部説明問題。下線部(B)を含む一文では、第二次世界大戦でアパートが焼失し、所有物をすべて失った経験から祖母がこのような態度を身につけるようになったに違いない、という筆者の推測が述べられている。それゆえ、ここで問題とされている態度は「アパートの部屋」に置かれている祖母の「所有物」に対する態度であることがわかる。このことが言及されているのは、下線部(B)の2つ前の文(Her apartment was furnished…)である。下線部(B)の‘unsentimental’に対応するのがこの文に登場する‘practical’であり、これを軸にして祖母がどんな態度でアパートに所有物を設えたかを解答する。設問の条件に「具体的に」とあるので、‘practical style’を具体的に言い換えているコロン以下の説明を必ず含める。他方、年代物のナプキンホルダーはpractical styleの例外として挙げられているので解答には含めないところにも注意したい。解答例では‘unsentimental’を「所有物に実用性以上の思い入れを持たない」と解釈して訳出した。‘practical’を反映させつつ、問5で問題となる筆者の‘sentimental’との対照が明らかになるように解答を整えよう。

問3は記号選択式の下線部説明問題。下線部(C)‘She will die a second death’の

意味を前後の文脈から推測する。この段落の冒頭では祖母の実際の死（1回目の死）が述べられている。これと対比される2回目の死とは何を意味するのかを考える。推測のヒントになるのは2つ。第一に、下線部(C)を修飾する従節 ‘When I’ m gone’ 「私が死んだときに」に注目する。直前の2文で述べられているように、祖母は筆者の記憶の中では生きているが、筆者の娘にとってはそうではない。それゆえ、筆者の死と共に「祖母を記憶する人がいなくなってしまう」と考えられる。第二に、下線部(C)の直後を見ると、仮定法で「私が死んだときでも、祖母の所有する物が何かあれば、それは祖母の人生を思い出させるものとして、異なる世代を繋ぐ思い出の品として役に立つであろうに」と述べられている。ここでの「異なる世代を繋ぐ」は筆者の祖母と筆者の娘を想定しており、「物」がなく「記憶」でしか故人を偲ぶことができないことを残念に思う筆者の心情が反映されている。以上から正解は(c)。

問4も記号選択式の下線部説明問題。下線部(D) ‘the resemblance’ の意味を前後の文脈から推測する問題。下線部(D)を含む一文は「この点で(In this sense)私が置かれていた状況は祖母と似ていたが、似ていたのはそこまでだ」。推測のヒントは ‘In this sense’ が指す「状況」にある。この段落冒頭の2文では筆者が渡米したときにポーランドで所有していたものをほとんどすべて置いてきたことが述べられている。また、第3段落の最後で、祖母は第二次世界大戦中にアパートが焼失したことで所有物をなくしていることが述べられている。したがって、筆者と祖母が似ている状況とは選択肢(a)「持ち物を失う経験」である。

問5は記述型の下線部説明問題。まず、下線部(E)の ‘sentimental about things’ は下線部(B)の ‘this unsentimental attitude’ と対照されている。したがって、問2で解答したような祖母の実用性を重んずる態度と筆者の態度が対比されていることを念頭に置く必要がある。その上で、最終段落に示されている対比に注目する。筆者と祖母の相違点が明確に述べられているのは ‘And unlike my grandmother…’ 以降である。ここで筆者は(物質的ではなく)情緒的な幸福(my emotional well-being)を得るためには物が必要だと感じていることが述べられている。具体例としてあげられているのは、おそらく渡米後に会って結婚したであろう夫と娘の持ち物が筆者にとって大切なものの中に加えられたことである(all of which I happily adopted as mine / were added to the set of important

objects)。これを踏まえて下線部(E)の直前で「私は収集家ではない」と述べていることから、物が増えることは筆者にとって物質的な満足ではなく、情緒的な幸福を意味していることがわかる。それゆえ、‘sentimental about things’とは、情緒的な幸福を得るために自分にとって大切な人の「物」を必要とすることだと考えられる。解答作成の際の注意点としては2点。設問の条件に「具体的に」とあるので、(i)筆者が‘sentimental’という語を採用した含意(祖母との対比)を明確にした上で、(ii)‘things’と‘my emotional well-being’の関係が明らかになるように夫と娘の事例を利用してわかりやすく述べる。

日頃から700語以上の長文読解問題に取り組んできた受験生にとっては解答しやすい問題であったように思われる。その一方で、仮定法や内容の対比、抽象－具体の関係を見抜くといった読解の基本が身につけているかどうかが強ク問われている。いわゆる「難問」に安易に飛びつくのではなく、基本を繰り返し練習することの重要性を再認識させてくれたという点でバランスの取れた良問であった。

#### 【個別分析設問Ⅱ】

音楽の聴き方について書かれた文章の読解問題。

和訳2題、下線部の日本語による説明1題、内容に関する選択問題2題、の構成。

問1は下線部和訳問題。the…advantage…is the…view…が骨組みになっており、単純なSVCの構造。主語と補語を後置修飾している部分をうまくまとめることができるかがポイント。また、直訳すると「利点は視点だ。」となるので、日本語としての主述関係をうまくまとめたい。前半に関しては、to be gained…がto不定詞の形容詞用法。直訳すれば「獲得されるべき/～されることになる」。splitting A into B「AをBに分割する」。ここでのhypotheticalは「いい名前がないのでとりあえずこのように名づけた」という下線部の前の記述の意を汲むと、「仮に設定した/仮に名前をつけた」という程度の意。「仮説上の」などと訳すのは文脈に合わない。viewは「見方」「視点」。to be hadは前述のto be gainedの言い換えと考えられる。of the wayのofは「～に関する/関して」。

問2は、下線部の具体的内容としてふさわしい選択肢(日本語)を選ぶ問題。下線部を直訳すると「自らを資格ある音楽愛好家とみなしている多くの人々は、音楽を聴く際のこの

段階を濫用している。」下線部の後の記述内容をまとめた(d)が正解。特に下線部の2文後に含まれる ‘a comfort and escape’ に着目すればよい。

問3は、下線部の理由としてふさわしい選択肢(日本語)を選ぶ問題。下線部を直訳すると「ここですぐに、われわれは議論に直面する」。controversyとは「賛否が分かれるので議論の余地がある」という意味。ここでは第二の段階である「音楽の表現力」についての議論がある、ということ。この段落と次に続く段落の内容から、特に次の段落の最後の3行の内容がヒントになる。

問4は和訳問題。the+比較級..., the+比較級... を用いた重要構文。その中にremind+人+of+モノという頻出表現が使われている。文中のthemは段落冒頭のsimple-minded soulsのことであり、内容として復元したい。また、the music ⇒ itと言い換えられているので、この点にも注意を払って訳文を作成したい。

問5は、下線部の具体的な内容を日本語で説明する問題。今段落最終文は、下線部の言い換えと読める。よってそれに挟まれた部分、結果として段落の最初と最後の文以外の部分をまとめることになる。楽器に、音そのものに、そして音楽形式に注意を払うのが、ここでいう「純粋に音楽的な段階」であることが読み取ればよい。

問1では本文の前提となる「聴く過程を3段階に分ける」という部分が、問2では第1の段階について、問3では第2の段階について、問4では第2の段階の補足に相当する部分について、そして問5では第3の段階について問われていた。文章全体を満遍なく読み通すことができたかを確認する問題だったと言える。

### 【個別分析設問 III】

日本の国内便を廃止すべきか否かについての討論。

内容一致選択問題5問、英問英答1問。

選択問題は本文の該当箇所と類似した表現を用いた文が多く、容易に探すことができる。1問目は KEIKO のセリフ3行目と一致。2問目は下から6行目、Finally から始まる2文に反するので誤り。3問目については、上から8行目 Now から始まる文で、「沖縄への移動は別にしても…」と述べていることから、沖縄へ行くという場合でなければ飛行機は必要ないという内容が述べられているため、誤り。4問目は JUNKO のセリフ5行目 Secondly から

始まる文で、気候の変化が重大な問題となっていることについては KEIKO に同意しているため、誤り。5 問目は JUNKO の一つ目の意見と一致する。

本文は、国内線の是非についての意見の対立を明確に設定した上で討論を始めている。従って、自分の意見を英語で述べる英作文は、賛成・反対の根拠としての新しい意見を述べるよりも、KEIKOとJUNKOそれぞれの意見のどの部分に同意するかを自分の言葉で述べるほうが好ましい。KEIKOは、①飛行機の利用は地球温暖化の原因になる、②沖縄を除けば国内移動に飛行機は不要、③飛行機の利用は費用がかかる、という3点を主張している。一方JUNKOは、①飛行機や空港にかかわる、またそれを必要とする職業が存在する、②飛行機の環境への影響は石炭の燃焼ほど深刻なものではない、③飛行機で移動する権利が人々にはある、の3点を主張している。これらのうち少なくとも1点に軸を置く形で、違った見方を提示あるいは自分なりに述べ直す。どちらに同意するかをまず明確にし、書き写しにならないように注意する。

#### 【個別分析設問Ⅳ】

出典は、隅研吾の『小さな建築』。昨年同様、部分訳 2 問の形式。一部英語に直すのに工夫が必要な箇所があるが、それ以外は文構造を正確に書けば十分だろう。

(A)「自分という弱くて小さな存在」、「世界という途方もなく大きいもの」の 2 箇所は、which を用いて補足的に説明するか、as ~とする。「A を B にしなやかにつなぐ」は「しなやかに」が訳しづらいが、connect A to B in a harmonious way、もしくは形容詞の flexible を用いて a flexible way of linking A to B と処理する。以上の 2 点がクリアできれば、文構造は標準レベル。

(B)「～に少しずつ気づきはじめた」は have little by little realized ~か gradually became aware ~と表現する。主節の動詞の時制に、that 節中の動詞の時制を合わせること。「大きなシステム」「大きな建築」は” the large system” or “the large architecture” か “the huge system” or “the big building” のように or でつなぐのがよいだろう。

2 合否ライン（予想）※他の教科が合格ラインをとったときの得点（％）予想

【文系】

文学部	65%
教育学部	65%
法学部	70%
経済学部	65%

【理系】

理学部	70%	歯学部	70%
工学部	70%	薬学部	70%
医学部	80%	農学部	70%
保健／看護	65%		
〃 検査	65%		
〃 放射線	65%		

3 来年受験する生徒へのアドバイス

基本的な構文、語法を正しく読み、書く能力を磨くことに尽きる。この能力が正しく身に付いていれば、和訳、英作文に十分対応できるであろう。同様に、選択問題の該当箇所、説明問題の解答として参照すべき箇所も、この能力があれば正しく見抜くことができ、結果として正答につながるはずである。また、英語による意見記述に関しても、自分の主張を明確にし、それに対する明快な理由を、わかりやすい英語で書ければよく、やはり基本構造を正しく身につけることによって十分な解答が作成できるはずである。

今回は出題されなかったが、要約や長めの意見論述がいつ出されても対応できるようにトレーニングをしておきたい。よって日頃から800語数クラスの長文を読み、その要約文や感想文を英語で書くなどしながら、文脈や筆者の意図を確認する習慣を身につけるとよい。